

編集委員会委員

深谷憲一

FUKAYA, Kenichi

財団法人運輸政策研究機構副会長・理事長

運輸政策研究機構は(財)運輸経済研究センターとして発足して以来既に40年以上になる。その間、国際問題研究所や運輸政策研究所を傘下に設置し、国際情報収集機能や政策研究機能を大幅に拡充強化するとともに、平成10年には名称を現在の(財)運輸政策研究機構と改め、名実共にシンクタンクとしての機能充実を図ってきた。交通運輸に関し、中期的、国際的、学際的視野に立ち、交通運輸政策の評価、提言を行うことなどで広く社会に貢献することが当機構の基本的使命だと考えている。財団の業務運営が、機構のよき歴史と伝統を踏まえつつ、機構の基本使命にかなったものになっているか、また、時代と共に日々進化しているか、公益法人としての本分にかなった活動ができていかなど考えながら、ふと昔入手したある文書のことを思い出した。もうずいぶん昔のことになる。25年以上にもなるだろうか。当時一枚の文書(メモ)が霞ヶ関に出回った。誰が書いたのか不明だが当時それなりに関係者の間で話題になった。皮肉に満ちた内容であるが面白いと思って今でもコピーを持っている。短いので紹介しよう。

それは「政策官僚への近道いろは」と題された15項目からなるものである。

- 1 絶えず新奇をてらうこと。…目新しくないと注目を浴びないから。
- 2 横文字の新造語を乱用すること。…一般に日本人は横文字に弱いから。
- 3 新しい構想にはキャッチフレーズをつけること。…覚えてもらいやすいから。
- 4 世界一素晴らしい構想だと思い込むこと。…他人も自分も信じ込んでくるから。
- 5 自分に与えられた責務には無頓着になること。…「責務」に縛られたらやっつけられないから。
- 6 他人の迷惑を恐れないこと。…他人への配慮など考えていたらやっつけられないから。
- 7 夢と現実との区別を無視すること。…実現可能性など考えていたらやっつけられないから。
- 8 ベダンテックに徹すること。…これがないと受けないから。
- 9 学者をうまく使うこと。…よりもっともらしくなるから。
- 10 各論には弱くとも良いから総論には強くなること。…総論にも弱かったら救いようがないから(各論は後から整理すればよい)。

- 11 説明の際には必ず「これには○つのポイントがあり」とポイントの数を示すこと。…仮に重大な欠落があっても話しぶりが頭脳明晰に聞こえるから。
- 12 説明の際には必ず数値、フローチャートなどを駆使すること。…論理的かつもっともらしく見えるから。
- 13 統計にしろ、諸外国の例にしろ、自分に都合の良いものだけを選んで都合の良いように利用すること。…そうしないと物事の構築が難しいことがほとんどだから。
- 14 絶えず20-30年くらい先の話をする。…このくらい先の話は誰にもわからないし、長期的視点に立った発言と高く評価されるから。
- 15 最後に弁舌はさわやかに、服装は派手目にする。

以上の15項目を実践することが政策官僚になるための極意だとこのメモは言っている。そうだろうか。

新政策を提言するとき、人々の関心呼び、説得的で、将来を見据えた意欲的なものが評価される。その意味で、新規性に富み(上記1)、人の目を引きかつわかりやすく(上記2, 3, 12)、信念を持って(上記4)、しがらみのある人達にとってはいやなことでも(上記6)、思い切って(上記5)、夢のあるもので(上記7)、専門家にも十分評価される(上記9)、将来を見据えたもの(上記14)であれば素晴らしい政策提言になるであろう。そう考えるとこの文書もなかなかいいところを突いている。少々お遊びの点もあるが(上記8, 11, 13, 15など)、ノウハウものと見ればうなずけるもする。

このメモが霞ヶ関に出回った頃から既に4分の1世紀以上が経った今日、政策提言をひとつの大きな使命としているシンクタンク業務に関わっている者として改めて目を通して見て、世の中の状況は大きく推移し、課題となるテーマは時代と共に変わっても、ある種の底流はあまり変わらないものだという気もする。

この落首的メモは「政策官僚」を厳しく皮肉っているが、一方、本物の「政策官僚」と「政策官僚もどき」とを良く見極めるとも言っているのだろう。今日、「政策官僚」という言葉をほとんど聞かなくなったし、むしろ死語に近いのかもしれない。

政策を官僚が担うべきかどうか今日議論もあるが、それは別にしても、わが国にとって不断の政策展開は今後も永遠に必要なことである。政策提言をひとつの大きな使命としている(財)運輸政策研究機構に身を置く者として、このメモが厳しく指摘しているような政策提言財団もどきになってはならないと考えている。